

報告 3 : 武 小燕 (名古屋経営短期大学)

魯迅精神の再検討と中国の国語教育改革

魯迅は海外で近代中国の文学者、思想家として知られているが、中国ではむしろ革命家として長く賛美され、国語教育では彼の作品が反封建主義・反帝国主義の見本として数多く収録されていた。改革開放以降革命的イデオロギーが色褪せ、作品の多様化が追求される教育改革では、魯迅の作品が断続的に削減されているものの、依然として収録作品の最も多い作家として国語教育で重要視されている。

ところが、2010年代末中国社会で「魯迅大撤退」論が起きた。それはある脚本家がブログで魯迅の作品が国語教科書から多く外されたことを「魯迅大撤退」と見なし、それがたちまち多くのメディアに注目されたことがきっかけであった。1990年代以降は魯の作品は一貫して減少傾向だったが、なぜ今更その是非が問われるようになったか。その背景には中国の世論社会の成長と魯迅研究の多様化があると指摘できる。議論の賛成派は魯迅の作品が過剰かつ難解であり、今日の教育改革にはふさわしくないと主張する一方、反対派は魯迅作品の価値を称え、今日こそ魯迅が必要だと異議を唱える。この議論は国語教育改革に止まらず、今日中国社会で必要とされる国民精神とはなにかに展開され、教育界、言論界、ネットユーザーに代表される草の根から様々な意見が挙げられている。そのなかで注目されるのは「魯迅精神」の再検討である。毛沢東に「革命性・闘争性・自己犠牲の精神」と規定された魯迅精神は、1980年代以降活発化した魯迅研究で生まれた「啓蒙魯迅」「人文魯迅」などの魯迅評価の多様化につれ、変化しつつある。

魯迅とはだれだ。魯迅精神とはなにか。魯迅と魯迅精神に対する評価には人々の時代認識が投影している。私たちがいかなる時代を生きており、この時代に大切にすべき精神がなにかはこの議論を通して人々の意見を垣間見ることができる。また、こうした議論は国語教育の役割に対する認識も関連する。この論争で何が議論され、それは何を意味しているかを考察して報告したい。